校訂『青龍山十祖伝』（二）

日比野　晃

はじめに

本稿は「校訂『青龍山十祖伝』（一）」（論叢第二十三号所収）の続編で、愛知県犬山市にある瑞泉寺の第三世から十世まで八人の伝記である。

『青龍山十祖伝』の著者肥田信易は、この八人の伝記の叙述にあたり、その内容・表現を次の諸本に依拠している。義天玄承・雪江宗深については東陽英朝著『正法山六祖伝』。雲谷玄祥・桃隠玄朔・特芳禅傑・東陽英朝については『延宝伝灯録』。景川宗隆については大休宗休著『龍泉景川隆禅師行状』。悟渓宗頓については槐山宗三著『大興心宗禅師行状』である。

したがって校訂するにあたって、『正法山六祖伝』（花園大学図書館蔵）・『龍泉景川隆禅師行状』（駒沢大学図書館蔵）・『延宝伝灯録』巻第二十八（「大日本仏教全書」）を校合本とした。

読解の便をはかり、次の原則にもとづいて校訂した。

一、底本には段落がないが、文脈に応じて適宜に改行した。

一、漢字は原則として新字体を用い、古字・俗字・略字などは通行の字体に改めた。

一、変体仮名は通行の平仮名に改め、平仮名は必要に応じて濁点を施した。

一、句読点・並列点を付し、現代仮名遣いにしたがって送り仮名をつけた。

一、特に読み難い語にはその右横に（　）をつけて振り仮名を付した。また、平仮名表現の語意を理解しやすくするために、その語の右横に（　）をつけて漢字を付した。

一、明らかな誤字・脱字は断りなく訂した。

なお、底本には和文体で叙述されるべきところを部分的に漢文体で記述されている個所があるが、これは訓読の形にした。しかし、偈・法語などの場合は底本のままとした。

本文の語句の注などは、語句の右に()をつけて番号を付し、末尾にまとめて記した。

黄梅義天大和尚伝

師、諱は玄承[1]、字は義天。法を日峰和尚に嗣ぐ。土州の人。俗姓は蘇氏、入鹿大臣の裔栄子なり。幼にして穎異なり。父、名づくるに王法師とす。十五歳にして本州天忠寺義山和尚に依って薙髪す。義山は雲樹三光国師[2]の高弟なり。師、とし(年)十八にして得度す。京に上り、直ちに東山建仁寺に至る。掛搭して開山塔護国院に在り、はじめ侍客に署せられ、又、侍香に転ず。孤芳和尚[3]住山の日、請して蔵主とす。結制に秉拂す。右京の兆源満元[4]、法筵に臨みて示聞す。左右に謂いて曰わく、吾が州の慶なり。既に蔵職を罷めて忽ち参方の興をうごかす。次年に起単し、福聚の春夫和尚[5]に見えて粗宗要を扣く。両年を経て辞去。東遊して尾の犬山に至り。瑞泉の日峰和尚に参ず。峰、もとより人を接するを以て急とす。槌払、倦むことなし。師も亦力を着けること猛烈にして、殆んど寝食を忘る。或いは磐石の上に通宵兀座し、あるひは廊廡の間に月を踏んで経行す。昼夜を捨てず専一に研究すること五年。大休歇の田地にいたり了れり。[6]日峰、付するに法語を以てす。其の略に曰わく、玄承蔵王、参禅年あり。雪辛霜苦、玄微を及盡す。風塵草動、宗猷を承当す。謂うべし、吾が家の真の種草なりと。直ちに是、把得定して生鉄鋳就するが如く相似たり。時に応永三十五年戊申の春なり。

已にして師、父の憂に丁(あた)って、郷里に還る。里人、胥議して曰わく、枌楡、今、烏鉢華を現す。豈、これ大因縁にあらずや、当に一寺を造って、以て師を留むべしと。既に山を鑿ち地を規(はか)って、師に白(もう)して言う、願わくは華扁を定めて開法の場となし給へ。師、久住の意なしといへども曲げて郷井の情に順って、卒に龍門山瑞岩禅寺の額を書す。いまだ工をそなへざるに、京に上って養源師翁[7]に参観す。辞去して濃州可児郡愚渓庵に居す。又、尾州瑞泉寺に徙(うつ)って看院し、年を累ねて、師翁入滅に及んで重ねて養源の塔主となる。三年忌に頌あり、阿鼻無間焔、天に亘る。日に口業を償うこと已に三年。熱鉄数枚を并呑し了りて、吐きて旃檀一炷烟となす。

是の時、右京兆源勝元[8]、年いまだ弱冠ならずして、一日、嵯峨に行って西京を経由す。師の養源に住するを聞き得て、枉駕して参礼す。むかし、先君春嶽居士[9]、日峰和尚を拝請して生死一大事を問ふ。此の因縁を以ての故に、こころを傾け至れり。且つ一梵刹を建て、師を請し住持せしめ、公余を以て道を扣くべしと、他日、人をして具さに懇志をのべ給ふ。師、感泣して然諾す。所を洛の東西に相見て、勝概を北山の巓に見給ふ。是誰家の山ぞ。父老答えて曰わく、徳大寺右相府[10]管内の地なり。京兆[11]、食邑の地一所を割きて奉じ、以てこれに易へ、遂に伽藍を草刱して師を拝請し、住持せしむ。号して大雲山龍安寺と云う。日峰師翁を奉じて開山始祖とす。四来の学者雲のごとくに集まり、上古の風規粛如たり。明年、京兆、また、丹州にて八木山龍興寺を建立す。

勅黄、忽ち降りて大徳寺に入寺す。三日にして龍安に帰り、妙心開山百年忌の辰に値って、十万銭を以て五山の諸刹に分送し、大衆

に俵蹶して大会斎を営弁す。師、拈香の頌あり

不レ知 伝 法 正 耶 邪　滅 却 還二他 老 骨 楂一
微 笑 春 回 百 年 後　華 園 猶 有二一 技 華一

師、面目厳冷にして、語は人情を容れず、諸方に畏憚せられ、龍安に住すること十余年。寛正三年三月十八日、衆に示し訖わって順寂し給ふ。世寿七十、法臘五十三。全身を奉じて大雲山西北の丘に塔す。師の法を嗣ぐもの、雪江和尚一人のみ。

［頭書］

師、旧名は明詔といふ。玄承に改む。晩年に又みづから玄詔と称す。

大徳寺・妙心寺は黄衣の山なりしに、師、勅を奉じて大徳寺に入寺し、始めて紫衣を賜わる。以後、代々紫衣となる。かるがゆへに、師の遺命に、われ死して像に画くことなかれと、先師に憚ってのたまひける。依って黄梅・愚渓・龍安に像なし。牌面を建てて祠ると云うなり。

龍済雲谷大和尚伝

師、諱は玄祥、字は雲谷、日峰和尚に法を嗣ぐ。江州の人。俗姓は蒲生氏。日野に生まる。業を本州永源寺に受けて、日峰に参叩して家法に契合す。俊機恢捷、其の禅に触るゝものなし。師翁、華園に移転の後は、義天・桃隠と交々青龍の看院して、半千の衆を接得し、義天に同じく当山第一座の請を受けて印可を蒙り、われは日峰の印可、瑞泉の住持なりとのたもふ。黒衣座元にて、世に是を雲谷大和尚大禅師と称す。当山の住持は今に大和尚なり。たとへ黒衣の前堂にても、この格にならひて和尚大禅師と唱ふ。山中の龍済庵を開基して小方丈とし給ふ。

時に斉藤越前守利永、濃州武芸山に一寺を草創して、師を請じて開山始祖とす。乾徳山汾陽寺と称す。康正改元の冬、当山[12]へ再住す。頌あり[13]

拠レ室横按二柱杖一曰、正按傍提仏祖乞レ命、横拈倒用魔外潛レ蹤

卓一下曰、従前汗馬無二人識一、只要三重論二蓋代功一
拈レ衣曰、鷲嶺不二是真伝一、黄梅亦非二親属一
挙レ衣曰、這個讐
搭起曰、等閑披起半肩雲、散作二甘霖一洒二百谷一

両祖真前拈香曰、両個老凍膿、叢林大妖孽、慣レ用二東山暗号子一、壊二却松源黒豆法一、従レ此父子逓相鈍置、令三児孫打二没折合一、果然一馬生二三寅一何免特地成二途轍一、諸人於レ斯明得、一双孤鴈撲レ地高飛、諸人於レ是不二明得一、一対鴛鴦池辺独立

師、病に依って退席し、汾陽に帰って順世す。康正二年七月八日、世寿五十五。門人、全身を奉じて山隅に葬る。勅諡、仏智広照禅師。

［頭書］

川向うなる法積寺村に法積寺[14]あり。師、こゝに居給ふか。龍済庵の開祖は師なり。二世を五岳慈因首座といふ。五岳の墓、むか

しより法積寺にあり。明和年に万瑞座元代、龍済へ引取り給ふ。右の法積寺は谷口村へ引移しありしを、又、今の取組村へ引移したり。慈因首座に、人、転位をすゝめけるに、師云う、転位はせでもよきものなりとのたまふ。

或る説に、雲谷和尚の遷化は知れず。七月八日、汾陽寺の後山に登り給ふを、隨徒、跡より慕ふ。峰にて師のかたらせたりといふ。

又、云う。汾陽寺開山堂前に池あり、こゝにかくれさせ給ふとも云う。詳らかなる事、知れず[15]。

谷口汾陽寺は師の後、悟渓和尚在りて、次に玉浦和尚[16]なり。今は玉浦派六ケ寺より輪住にて住職す[17]。汾陽寺に悟渓和尚の遺命にて、玉浦和尚の規定あり。其の文にいふ、尾州瑞泉寺の格にならひて、当山一回の住持はたとへ妙心の座元たるとも、歿後は必ず和尚大禅師と位牌に認むべしと。ある当番の和尚は木蘭衣を用ゆ。汾陽寺、瑞泉寺の格にならってとあれば、当山の規定は猶々重き事なり。こゝを以てしるべし。

慈明桃隠大和尚伝

師、諱は玄朔、字は桃隠。京の人。姓氏は知らず。しる人、これを添え給へ。師、幼より道に志し、東山に登りて薙髪・染衣し、輪蔵を典る（つかさど）。日峰和尚に見（まみ）へ、鑽研・精究す。一夜、窓下に座して倏然として開悟し、偈を作りて曰わく

白日青天三十棒　都盧大地黒漫漫
夜来依レ旧開レ窓坐　蘿月松風毛骨寒

日峰、便ち（すなわ）許可す。去る。師は当山五世の住職なり。慈明庵を草創し、小方丈とす。時に当山永世の規定を書き残し給ふ。其の文に曰わく

定

当山住持職之事、為開山、子孫之諸老、順次ニ勤務可被致之事
一、縦令雖為其仁没後、依児孫之願望者、可被準当山一世之視篆之事
一、諸転位等者、上香開山真前而、職状可有降下之事
右之件々、先師遺命之定規也
康正二年丙子九月二十六日
現青龍山主玄朔、於于慈明庵下書

師は法兄義天・雲谷と同じく、当山第一座の請を受けて、日峰和尚の印可なり。三僧を当山に転位のはじめといふ。三僧、師翁の命を蒙りて交々看院し、又、讃岐国に慈明庵を草創し、単丁止住す。風雨は坐を侵し、薪水は纔かに給う。道義は高峻にして機を契す者なし。因の偈ありて曰わく

烟雨三年南海涯　一簑空睡二釣魚台一
幾多蝦蜆貪二香餌一　未レ遇二金鱗衝レ浪来一

勢州の保々郡守朝倉氏、師を請じて、保福山大樹寺を建立し、開山始祖とす。又、同門の請に依って当山に再住す。両祖の真前に香を拈じて曰わく

者香敷二子葉於威音先一、天眼不レ見、繁二孫枝於婁至後一、仏手難レ攀、咄、拈来天下与レ人看、恭惟一個生前莽鹵、一個死後顴預、百醜千拙、各恣二癡頑一、於レ我無二隔宿恩一、已是無二隔宿恩一、為二什麼一薦以二蘋藻一、焚以二栴檀一、大衆聴二取山僧点破一、青龍窟裏二龍蟠、頷下明珠照レ胆寒、以レ香打レ炉一下曰　今日一槌槌砕了、臘梅吐出鉄心肝

退院の上堂は

一住五年如レ履レ氷　春風捲レ衲下二危層一
不レ知何処得レ安レ枕　万里江山七尺藤

雲谷祥、瑞泉に住し、賀して偈に曰わく

鳥藤七尺靠二春空一　昨夜無レ端化二大龍一
衝二破天源濤万丈一　五湖四海一斉従

師、臨終に箆を拈って、隆侍者字景川に示す。侍者、契せず。箆を擲下して化す。時に寛正二年辛巳六月廿一日。勅諡、禅源大沢禅師。

［頭書］

或る書に云う、雲谷・桃隠の二和尚に法嗣なし。一世にして絶すとあり。日峰和尚印可の大事は、両僧法叔と成って、雪江和尚を屢々はづかしめ育て、以て日峰の印可をこゝにおさむ。雪江、四派祖と成って、其の法、今、世に顕然たり。

当山の什宝、準住持追贈の規定は貴きものかな。此の和尚の筆跡にて、永世当山の証拠となる。既に文政年間、本山より一たん停止するといへども、開山の遺命、師の墨跡、本世に光りを放って万代の重宝なり。可尊々々。

妙喜雪江大和尚伝

師、諱は宗深、字は雪江。摂州の人。俗姓は源氏。其の先は野間の侍中、勇を以て聞こゆ。尊氏将軍、開運の初め召して、食邑を野間に賜ふ。依って家居す。師、生れて穎利なり。齠齔にして出塵の気質あり。稍長じて親に辞す。親、愛を割かず。竟にのがれて京に走るみちに、一僧に逢ってともに行く。五条橋に及んで其の僧問ふ、子はいづくにか行く。師、因って依付の情を伸ぶ。僧、則ち相携えて建仁の五葉庵に帰して、文瑛禅師[18]に付す。禅師、一見して器許す。名づけて正深と云う。撫憐、年を経て、一日、西に帰って親を省す。郷邑に薬師堂あり。頗る霊験の尊像、師こゝに詣でて黙禱し、但願わくは頓に心地を発明せんことを。既にして再び東山に帰り、晨鐘暮鼓、一々玄奥を発参せずといふことなし。こゝにおいて本師を辞す。

尾州に赴きて瑞泉の日峰和尚の席下に在り、参堂より啖辛喫苦すること年久し。和尚、花園に移転。これに従って花園に至る。養源院、枯淡にして人乏し。自ら請いて維那すること三年。常住の飯を喫せず。師、既に参学相羅といへども未だ印証を蒙らず。日峰、人に向ふ毎に、正深維那は必ずや一方に在って人を接し去らん。仍って諱を宗深と改め、字を雪江と称し給ふ。一日、勧諭して曰わく、子、姑（しばら）く承蔵主[19]に従ひ去れ。時に義天和尚、当山を看院し給ふ。東して師兄の鑪鞴に入る。旭鍛曛錬、艱難備（つぶさ）に嘗すること年あり。義

天の風、孤硬にして当りがたし。軽く人を許可せず、請益するごとに呵咄にあふのみ。天[20]、龍安寺に住するに及んで、師を養源に塔主たらしむ。猶以て寅夕、龍安に往復し、入室参詳す。衆に混じて孜々たり。後学、これを知らず。窃(ひそか)にいへらく、院主、機薦まずと。両師叔[21]、これを聞いて、時に又、痒を爬(か)く。しかれども面に慙じるいろなし。

当山[22]入寺の時、妙喜庵を建てて小方丈とす。妙心にては衡梅を建立す。

義天、示寂に臨んで師に法語を付して曰わく

自二従老虚堂付二心印於大応一至二先師一第六世、紹継綿綿不レ絶也、宗深座元久侍二先師一参禅有レ年矣、山僧詰二其所以一、祖師全機証徹已至二深奥一矣、山僧又何言、書以為二印証一焉耳

粤(ここ)に旬余にして義天和尚入滅す。

京兆、便ち礼を具し、師を請して龍安寺に住ましむ。雲谷・桃隠相次いで遷化す。汾陽・大樹[23]、其の嗣を絶す。ゆへに三老の会下、皆師の席下に輻湊す。妙心・海清・観音・瑞泉・龍興以下の自門は、唯師の一統にして住持す。

寛正三年秋、大徳寺へ入寺す。三日にして龍安寺に帰る[24]。しかるに応仁元年丁亥、天下大いに乱る。洛中の大小刹、尽く兵火に罹る。大徳・妙心・龍安もまた焦土となる。師、丹の龍興にうつる。

師、少(わかく)して貧窮なり。はじめ瑞泉に在って、寒暑に唯一衲、あるひは紙をつらねて手巾とし、しかも飢寒の為に志を撓さず。頗る聱頭の気節あり。一日、次第の請に赴いて土佐の藤氏石窓居士の家にいたる。純一休[25]狂雲、先ず座上に在り、師、拶して曰わく、金翅鳥王、宇宙に当る、龍宝山裏の龍、如何んが出頭し得ん。純、扇子を拈起して劈面に打たんと擬す。師、掣取して地に擲つ。居士、視て愕然たり。こゝによって師を崇重し、毎々檀施を致す。また衣食の資を闕くことなし。遂に以て日峰に侍奉すること十九年、又義天に請益すること十五年。前後三十霜、霜辛雪苦、古今比倫なきものなり。師の性、素より褊急なり。桃隠和尚、かって戯れに急性菩薩といふ。夫れ、ゆへあるかな。熱喝、雷奔し、迅機、電掣の如くに至っては、則ち天魔、胆を失ひ、魂を亡くす。高義、秋潔く劇談し、春和する。則ち蘭提も誠を傾け信を具す。加之(しかのみならず)、大度雅量これを天禀に得て、風韻才華、夙董に殆し。是の故に叢林の名衲、江湖の飽参、武を接(つ)いで相見す。晩きを以て恨みとなす。以至(これより)、文武の尊官・貴介・国太・四衆・群迷、瞻礼し帰依すること勝(あ)げて計(かぞ)うべからず。

己亥[26]の三月、独り北窓に依って将に書せんとして俄かに置いて倒る。侍者を呼んで扶起せしむ。起き来たって稍甦る。これより中風して左脚、跛たり。起つことを得ざること八年、事を龍安に謝して法山に帰老す。病床に伏すといへども、四来の応酬、機に臨んで、倦むことなし。嬉笑怒事、咸(みな)仏事を作す。時に肩輿に命じて以て意行す。遠近を言わず、毎(つね)に龍翔の祖塔に詣でて、侍者に命じ代わって炷香せしむ。塔院の弊漏を視て、則ち経費を奉じ以て修葺せしむ。多くは涼轎に乗じて郊野通衢に出て、無縁の慈を行じて楽とす。或いは包笠を捉住して其の来由を弁じ、或いは負販を招呼して、皆弟子となす。乃至(ないし)、異類といへども逢う時は名を安じ、庄園、産を貢

する時は担夫を階下に召して酒食を以てこれに労す。稚髻頼肩に命じて歌呼踏舞せしめて、意を縦(ほしい)ままにして遊ばしむ。師、見て大いに笑って絶倒す。一日、侍者を召して誡めていわく、われ死せば便ち埋めて刻を移すことなかれ。言訖わって泊然として示寂す。文明十八年六月二日なり。世寿七十九、法臘六十二。徒、遺命を以て、全身を奉じ、法山衡梅院の塔に瘞す。師の法を嗣ぐ者、大亀景川和尚・臥龍悟渓和尚・輝東特芳和尚・臨渓東陽和尚四人なり。勅諡、仏日真照禅師。

［頭書］
雪江号

氷花飄乱凍風寒　沔水渡頭行路難
一色明辺点不レ立　看来蕞老激二波瀾一

宗深上人求二別称一、授二雪江二字一作レ偈以証云

文安第三丙寅仲冬日、養源日峰叟八十歳書

大亀景川大和尚伝

師、諱は宗隆、字は景川。雪江和尚第一の神足なり。俗姓は平氏。勢州の人。誕にして頴利なり。錐の嚢中にあるがごとし。長ずるに及んで、父携えて本州円明寺に投じて薙染せしむ。師、もとより参方の志あり、十九歳に及んで尾の瑞泉寺にいたり雲谷和尚に見ゆ。谷、示すに東山阿誰話を以てす。是に於て日日時時参究す。三條椽下、七尺の単前、脇の席に著かず。困すれば、巾を以て柱にかけ、自縛して動ぜず。此の如くにして三寒暑を経れども、未だ開発すること克せず、歎じて曰わく、仏、大方便あれども無縁を度すること能わず。われ和尚に於いて縁なきか。方丈に詣りて暇を請ふの次いで、問いて曰わく、如何なるか是仏法的々の大意。谷曰わく、何ぞ寸艸なき処に向って去らざる。師曰わく、如何なるか是無寸艸の処。谷曰わく、門を出ずれば便ち是艸。師、払袖して去る。遂に濃州愚渓寺に適(ゆ)きて、義天和尚に参見し、扣くに前話を以てす。未だ三日を歴(へ)ずして省あり。以来、寅夕孜々として勤めたり。和尚、洛の龍安寺草創なり。徒衆と同じく土木の役に堪えず。引き去って、桃隠和尚讃州慈明庵に居り給ふを聞くに、頗る風穴楊岐の風あり。往きて謁す。問いて曰わく、如何なるか是仏法的々の大意。隠曰わく、吾が宗に語句なし。又、一法の人に与するなし。師曰わく、謂うべし、満把の驪珠は人に撒向すと。隠云う、伊這(こ)の般の事をしらば便ち休せよ。翌日、茶話の次いで、師に云いて曰わく、昨夜我が夢みらく、伊此に到ると。果たしてしかり。隠師、彼にありて樵汲の労に耐えられず。俄かに勢州の行を企つ。師もまた従って寓居す。保々郷朝倉氏、私第を捨てて大樹寺を建つ。学徒、輻湊す。師、嘗て鼈鼻蛇の話に参じて、口を杜(と)じること三年。京の龍安に帰って、再び義天和尚に参ず。和尚、住持の事繁にして、志を遂げること克(よく)せず。大樹寺に却回す。隠、又示すに、保福喫茶去の話を以てす。彼に在ること三年。又、洛に入って義天和尚に見ゆ。契せず、遂に桃隠の会裡に帰る。隠、師を見えて拶して曰わく、来々去々してなにかせ

ん。師曰わく、始めは芳草に隨って去り、又、落花を逐って回る。隠、呵呵大笑す。因って隠師の左右に侍すること十三年。碧巌百則の公案に参得す。已にして隠師、不安溢然に臨んで、師に接せんと欲す。師、契会すること能わず。隠、竹篦を擲ちて逝す。塔下に侍すること五旬。隠師、痛みて針箚す。故に二十五年忌の辰、大樹に遷住して、拈香して云う

那伽二十五年強、先父宗猷脣未レ亡、撥二転定輪一、清浄眼、乾坤輝耀、大慈光、仰惟前住瑞泉刱建本寺桃隠和尚大禅師、叢林妖孽大樹蔭涼下文略

後、龍安に入って、許多の話頭に参得す。義天和尚遷化す。雪江和尚継席す。一日、会下に在って豁然と大悟し、投機の偈を呈して曰わく

痛棒機先不レ讓レ師　一拳拳倒五須弥
威風凜凜徧二天地一　三拝慇懃依レ位時

仏日[27]、之れを印して曰わく

臨済正宗自二従百丈黄檗一闡二大機一発二大用一、脱二羅籠一出二窠臼一、虎驟龍馳雷轟電激、巻舒擒縦皆拠二本分一、綿綿密密、従二松源一正到二山野一其派脈已十一伝了也、宗隆蔵主多年入二余室中一朝参暮請、闡二大機一発二大用一大徹大悟領二略得従上祖師嶮峻一著子一、可レ謂、吾家真種艸也、宜下荷二担正宗一建二大法幢一燦二大法炬一而化二導群盲一以中起臨済正宗上者也、思レ之、珍重

寛正五年仏成道日、雪江宗深於二龍安室内一書レ之以為二証明一

印証を受けてより、酬対響くの如く、機鋒敵なし。郡衲麇集し、四海鶴望す。大龍山興雲寺を草創し、義天和尚を開山とし給ふ。大徳寺へ入寺。重ねて降りて妙心寺に董すこと両次。尾の瑞泉及び龍安・龍興・大樹に住して衆を匡し、徒を領す。右京兆政元[28]、大心院を刱して、師を以て住持せしむ。明応九年、年七十六の春、微疾を示す。薬剤、効しあらず、三月朔日、自筆を執って、遺偈を書して曰わく

元本無明七十六歳、末後牢関三千條罪、喝、両喝

筆を擲って寂を示す。諸徒、遺命に依って、全身を華園西南の隅に蔵む。為に一庵を縛して龍泉と号し、方墳を築きて大亀と扁す。法弟特芳、額を書す。師の顧命なり。其の法を嗣ぐ者十弐人。西浦粛・春江蓓・悦堂懌・柏庭松・松嶽繕・景堂訥・清巌以・懶室牧・啓庵迪・月渓紀・高安邵・景趙諗等なり。師、青龍山輪住に大亀庵を草創し、小方丈とす。後、龍泉院と改号。正保三年冬、勅諡、本如実性禅師。

臥龍悟渓大和尚伝

師、諱は宗頓、字は悟渓。雪江和尚第二の神足なり。尾州丹羽郡山名村百姓何某の子なり。姓氏は詳らかならず。或る夜、父母寐て、父は既に熟睡す。母はいまだ寐むらず。人、跫然として来たりて、母の懐に入る。これを模するに一僧なり。母絶叫して云う、僧来たりてわが懐に入る、父起き給へと。父驚きてこれを見るに、大人、身を聳して戸を出て行く。父云う、是盗賊と。声を揚げて呼ばりけ

る。一村の人々、馳せ集まり、其の行く所を追ふ。村の釈迦堂前にて形失せたり。木像の釈迦、顕然たり。人々断腸して云ふ。正賊にあらず、狂夫何をかいふ、寐言なりと。父聞いて愧づ。いかりを木仏にうつして云う、釈迦、人の婦妻を偷(ぬす)んで愧を知らずやと。大いに罵って帰る。人々これを聞き、手をうって大いに笑って分散す。其の婦、十日を歴(へ)ずして懐妊す。父云う、若し男子産まれば出家せしめんと。十ヶ月にして誕生す。応永廿三年丙申　みな人云う、釈迦の子誕ると。長ずるに及んで、父携えて一僧に投ず。得度の寺、詳らかならず　後代、父の家、村民住居する時は微疾を得る故に、空地となる。村の顕宝寺に附属す。後世、呼んで悟渓屋敷といふ。楠の一樹あり、枝葉繁茂す。人、これを採らず。

師の小師は瑞徴首座と云う。師の滅後、仁宙和尚の座下にあり。大永二年壬午三月、天瑞と号す。則ち仁宙の上足なり。[29] これは師の業を受くる師か。師の父、字は真叟、諱は道詮。

師、永享年中、日峰大和尚に出て左右に侍す。親炙教誨あり。妙心再興にて、師、亦隨身す。歳十七、八の頃なり。又、日峰和尚を辞去して雲谷和尚に参侍す。又、愚渓寺に行って義天和尚に参請すること年あり。時に桃隠和尚、保々大樹寺に在り、又こゝによりて参請すること年あり。隠、遷化し給ふ。塔下に在ること五七。[30] 後、京に上りて龍安の雪江和尚に参侍。江曰わく、桃隠遷化し、影堂下に侍するもの五十日を歴ずして上洛す。太(はなは)だ早計かな。便ち参堂を許し給ふ。大根機を具し、悪辣鉗鎚を施し給ふ。[31] 小根機の輩は勤苦に堪えず。師は會(かつ)て倦色なく勤むこと一回。又、浄頭職に充つ。師、上上根といへども手足を措(お)きがたし。請暇を報ぜず、袖払して出で去る。後、席下に再来し親炙。次いで豁然として大悟す。投機の偈を呈して曰わく

石火電光猶鈍遅　機前一喝碎須弥
衲僧更有転身句　展鉢開単喫飯来

師、印証を受けてより往(のち)、機鋒、敵なし。道化の盛んなること、杲日の如く麗天かな。

尾州丹羽郡犬山瑞泉精舎の境内、師、相攸の谷の南、一草を挿み、臥龍と云う。瑞泉の封疆、山半嶺にして古来水なし。日峰禅師相攸より、乍(たちま)ち甘泉湧出の岩間あり。以て故に曰わく、瑞泉。又、湧出の池、名づけて宿龍池といふ。竹篁を修めて潤色し、常住・庫司は寺中南北の院。院の徒衆、半千に及ぶ。其の萃を抜すは塔中八ケ所。此の八院より分院に支派し、院の惣数七十有余。密脾を綴るが如しといへども、井浅くて時々汲渇に労す。臥龍の一庵は、師、厚費を掛けずして、心頭に深井を貯える。轆轤縄の長きこと十一肘余。定水、湛然として始終汲渇せず。又、飲乾なく、今に至るに三十貫井といふ。然して大蔵経を臥龍に置かる。其の旧趾は今、経堂といふ。臥龍の後山なり。

時に洛の大徳、其の席を虚す。特に綸命降る。勅師、開堂して法を演ず。衆は大驚して聴く。大徳の席を匡すは両回。又、妙心の匡席も両回。瑞泉に視篆両回。又、尾州春日井郡山田庄光音寺は、東福門徒以東の名藍なり。久しく住持の人を欠く。師を敦請す。師の光音寺に単丁するは、年数詳らかならず。師、自ら退鼓を撾つ。依っ

て他山の児孫の補闕されざるところとなりて、往(さき)の殿堂・廊廡零落す。而後、曹洞の僧、一庵を縛して住居す。師の画像、今に至るに壁間に掛かる。又、濃州厚見郡金華山の傍に台宗名刹の旧趾あり。師、此の半嶺に相攸す。斉藤氏大年妙椿[32]と固く師檀の約にて伽藍・洪基を創って、日々衆を率いて瓦礫を拾ひ、荒草を芟除す。力士・星、簀を馳負す。巧匠霧列して運斤す。則ち五年を歴ずして其の功大いになる。殿堂・楼閣、法に依って備わり、七堂は黝堊丹漆せざるなし。聞く者、拍手し、見る者、目を駭して云う、帝釈・梵王の降地かと疑い、覩史・夜摩の離天かと怪しむのみと。四衆の歓呼、未だ會て有らざるなり。山曰わく金宝、寺曰わく瑞龍。又、辱(かたじけな)くも朝廷に額を賜わる。宸翰の奎画、鳳舞龍翔にて赫々然たり。これより諸方の名衲、江湖し飽参す。日々輻湊し、忽ち龍象の大法窟となる。徒衆、七百に及ぶ。大年椿公、師道を欽仰して山門の為に外護す。法を嗣ぐ者九人、各東西の谷の華構なる院に相攸す。院は、瑞雲院天縦受・龍徳院西川洵・龍振院仁済恕・息耕院玉浦珉・雲龍庵寿岳彭・巣雲院鏡隠贇・龍岡院瑞翁縉・鶴栖院独秀才・開善院興宗松。

大年椿公、亦、師命を奉じて、西山の半嶺に相攸す。私(ひそ)かに一院を創む。師、扁して曰わく開善。此の時、興宗松[33]、少にして一物もなく、貧窮なり。師、これを憐みて、衣鉢閣に居らしむること三年。然して開善を以て興宗に賜ふ。侍衣の勤めの後、開善に居を移さる、日、担夫、衣鉢閣より運び出る。已家より珍は七十荷。これ九院の外、亦、東西の谷に分れて院々楼々、雲雨の上に出没するが如し。是に至り、仏日禅師雪江を奉じて、開山始祖となす絵を命じ、真質を以て賛語を請う。

無下弁二龍蛇一眼上、無下擒二虎児一機上、胡為拈二起竹篦子一、容易搭一著金縷衣一、指レ槐罵レ柳、将レ是作レ非、凌二滅宗猷一瞎長老、不レ知何処振二全威一、咦

宗頓首座、絵二余幻質一需レ賛、述レ之以塞二厥請一云

時応仁初元仲秋日、前龍宝山主雪江老漢書レ之

然して後、嗣皇綸命を降し、十刹の例数に準じられてより以来、瑞龍に於ける行僧・官は誣せず。尊命に依り、綸言の旨に任じて、年年印紙数十枚を以て、犬山の臥龍庵に助与す。是故、比丘・行僧・官に塔を守らしむ。

金宝山瑞龍禅寺者、紫野大徳寺之門徒也、先院御時草創之刻、被下勅額上者、早以準十刹之例数、可奉祝万歳之宝祚者、天気如此、仍執達如件

文明二年庚寅三月十四日　　権右中弁兼顕[34]

宗頓上人禅室

明応九年庚申秋、微疾を示し、九月六日溘然として寂を示す。世寿八十五、法臘六十三。開山仏日禅師の右に塔す。塔を虎穴と扁し、院を徳光といふ。遺命に依って瓜瓞の諸徒、輪次し交代周して始めに復り、綿々として絶えざるなり。師の法を嗣ぐ者九人。筵田慈雲寺、天縦受。龍徳寺、西川洵。蜂屋瑞林寺、仁済恕。山形大智寺、玉浦珉、余野徳林寺、寿岳彭。鏡隠贇は聾を患いて胎厥なしか。粟野大龍寺・一色天衣寺、瑞翁縉。長良崇福寺、独秀才。加納大宝寺、興宗松。

［頭書］

文明十二年庚子正月廿六日の香語[35]に

縦滄海変恨何窮　三喚機前味已躬

昔日花園活埋了　連腮悔不レ掌斯翁

輝東特芳大和尚伝

師、諱は禅傑、字は特芳。尾州熱田の人。姓氏は知れず。業を妙喜院瑞岳石に受く。去って義天・雲谷・桃隠に参じて、又、雪江の輪下におゐて契悟す。瑞泉・龍興・海清に住して、妙心寺に移り、又、丹州龍潭寺を開き給ふ。右京兆源政元[36]の為に龍安寺を補し給ふ。当山輪住中に輝東庵を建て、小方丈とす。文明戊戌の秋、詔ありて大徳寺へ入る。示衆に、天下の大禅仏、便ち是万人の傑と唱へ給ふ。これを四方に伝えて偕と云わず。自真讃[37]に曰わく

弥二綸宇宙一逼二塞乾坤一、青山万疊緑水一痕、叨呈二醜拙一露二此面門一、好個破砂盆堪レ補　等閑拈出付二児孫一

永正三年九月十日、西源に化す。閲世八十有八。承応三年夏、勅諡、大寂常照禅師。法を嗣ぐ六人あり。

臨渓東陽大和尚伝

師、諱は英朝、字は東陽。美濃賀茂郡の人。俗姓は土岐氏。五歳にして京に上り、天龍の玉岫種[38]を拝し、童役をとる。稍長じて落髪・円具す。資性濬発にして、内外の経書、目に過れば即ち記す。文雅あり。又、岫に隨って南禅にうつる。辞去して徧問す。雪江の道望を聞いて龍安に行き、志を決して之に依る。密印を承け、丹の龍興に住す。文明辛丑春、勅を奉じて大徳に権す。住持、周歳にして、妙心に遷り、三寒暑をへて瑞泉に董す。檀越の源司農丞[39]、少林寺を刱して、師を請じて第一祖となす。又、大仙・定恵の二寺を開き、黒白崇嚮すること、衆水の海に帰るがごとし。当山の輪住中、臨渓院を建て、小方丈とす。永正元年秋、少林寺におゐて微恙を示す。八月廿二日、偈を作りて曰わく

造化小児休レ嬲レ人　霊台不レ動二一微塵一

侍僧労苦以レ何謝　籬菊半開楓葉新

翌日、源司農、師の照容を写し、讃を請ふ。即ち書して曰わく

呼二翠竹一為二真如一錯、喚二黄花一為二般若一錯、畢竟有若非二仲尼一、画師画師莫下将二五竺一鉄一鋳中一大錯上、錯

又、廿四日、遺偈を書して曰わく

涅槃四柱一時拗折、看看、珊瑚枝々撐二著月一、憑レ甚魔宮化レ墨　魔胆落、喝

筆を捨て、坐化す。寿、七十七。臘、六十四。少林に塔す。承応二年秋、勅諡、大道真源禅師を賜う。

注

(1) 『正法山六祖伝』には「旧ノ名ハ明詔。後、玄承ト改ム。晩年ニ又、自ラ玄詔ト称ス」と注記されている。

(2) 孤峰覚明（一二七一～一三六一）。叡山で受戒したのち、無本覚心・南浦紹明などの教えを受け、一三一一年には元に渡って中峰明本・古林清茂・雲外雲岫などに歴参した。帰国後、雲樹寺を開創し、後に国済国師・三光国師の号を受けた。

(3) 『延宝伝灯録』巻第二十八では、「古芳菊龍湫沢嗣」と記され、龍湫周沢の法嗣である古芳阿菊。阿菊は建仁寺一一七世。

(4) 細川満元（一三七八―一四二六）。室町時代前期の武将で、幕府の管領。右京大夫。

(5) 春夫宗宿（生没年不明）。五山の諸老に参じた後、無因宗因に参じて印可を受けた。筑前の崇福寺に住持したのち、京都に戻り、普門山福聚院を開創した。

(6) この時の義天の偈は「并呑東海鉄崑崙、刹界三千一等昏、瞎卻娘生眼睛了、当陽突出破砂盆」

(7) 日峰宗舜。

(8) 細川勝元（一四三〇～一四七三）。室町時代前期の武将で、幕府の管領。右京大夫。細川満元の孫であり、細川持之の子。畠山氏の内訌問題を契機に、山名宗全と対立して応仁の乱となった。

(9) 細川持之（一四〇〇～一四四三）。室町時代前期の武将で、幕府の管領。右京大夫。

(10) 徳大寺公有。公有は一四六二年八月から一四六四年九月まで右大臣。

(11) 左京職・右京職の唐名で、右京大夫であった細川勝元を指す。

(12) 青龍山瑞泉寺。本書（『青龍山十祖伝』）の筆者は、瑞泉寺の塔頭龍済庵を檀那寺としており、筆者にとって身近な瑞泉寺を、本書の各所で「当山」と表現している。

(13) 進山（住職として寺院に正式に入る）の法式に際して、拠室・開山堂などで唱える拈香法語のことを指す。

(14) 大祥山宝積寺。宝徳年間（一四四九～五二）に、雲谷が開山となって創建されたという。谷口村に汾陽寺が建立された時、この寺は汾陽寺中に移して塔頭とされたが、その後、衰廃したのを恵稜泰嶺が坂祝村に移して再興した。

(15) 雲谷玄祥は木曽川の栗栖の渡しを渡る途中に舟が沈んで没した。（関董光著『青龍誌考㈠』）

(16) 玉浦宗珉（？～一五一九）。法を悟渓宗頓に嗣ぎ、美濃山形の大智寺の開山となった。瑞泉寺（二〇世）・妙心寺（二一世）・大徳寺（六五世）に歴住した。大用弘照禅師。

(17) 一六一九年に谷口村は尾張藩領となり、一六九四年に同藩寺社奉行の命令で、大矢田村道樹寺・上有知村清泰寺・神淵村龍門寺・平村龍福寺・宇多院村陽徳寺・岩佐村龍吟寺の六ケ寺で、汾陽寺の住職を一年ずつ勤めることになった。しかし一八五一年には独住地に改められた。

(18) 文瑛法璵。建仁寺一五九世。

(19) 義天玄承。

(20) 義天玄承。

(21) 雲谷玄祥と桃隠玄朔。

(22) 主語は雪江宗深。

(23) 汾陽寺の開山である雲谷玄祥と大樹寺の開山である桃隠玄朔。

(24) 東陽英朝が著わした雪江宗深の『行状』では、この三日にして龍安寺に帰った理由として、「義天の例に隨うてなり」とある。

(25) 一休宗純（一三九四～一四八一）。臨済宗大応派。別に狂雲子・夢閨・瞎驢・国景・曇華とも称す。京都の安国寺象外禅鑑の童子となり、清叟師仁・慕哲龍攀などに詩作を学ぶ。のちに謙翁宗為・華叟宗曇に参じ、宗曇に印可を受けたが、のちにこの印証を火中に投じ、各寺を歴遊した。また、大徳寺住持に請ぜられたが、進住しなかった。

(26) 一四七九年。

(27) 雪江宗深。その諡号は仏日真照禅師。

(28) 細川政元（一四六六～一五〇七）。室町時代後期の武将で、幕府の管領。右京大夫。細川勝元の子。

(29) 嘉永重撰『正法山宗派図』によると、悟渓宗頓―独秀乾才―仁岫宗寿―天瑞瑞徴の流れがあり、底本の「仁宙」は仁岫宗寿の誤りであろうか。なお、『禅学大辞典』（大修館書店発行）の「禅宗法系譜」には、仁岫宗寿の法嗣は快川紹喜と孤岫宗俊の二人のみで、天瑞瑞徴の名は載っていない。

(30) 「五七」は掛け算の表現で、三十五（日）。

(31) 主語は雪江宗深。

(32) 斉藤妙椿（一四一一～一四八〇）。室町時代後期の武将で、美濃国の守護代。応仁の乱では西軍に属して活動し、美濃と京都の連絡路線の確保に盡力した。一条兼良との交遊もあって和歌も嗜み、持是院権大僧都大年妙椿とも号した。

(33) 興宗宗松（一四四五～一五二二）。悟渓宗頓に印可を受けたのち、妙心寺（二二世）・龍安寺・大宝寺（開山）・大徳寺（六九世）・瑞泉寺（二四世）を歴住した。大猷慈済禅師。

(34) 広橋兼顕（？～一四七九）。

(35) 日峰宗舜の三三年忌に、悟渓宗頓が咏じた一首。

(36) 細川政元。

(37) 紹珍首座の要請によるもの。

(38) 玉岫英種（生没年不明）。天龍寺九三世・南禅寺一四〇世。

(39) 薄田源左衛門尉藤原祐貞。